夕顔巻の物の怪の正体についての考察

森川菜々子

はじめに

『源氏物語』夕顔巻では、源氏が夕顔を某の院に連れていき、そこで夕顔が物の怪に襲われてしまう。本稿ではこの物の怪の正体について、新しい説を述べていきたいと思う。

まず、夕顔巻の物の怪が現れる該当箇所を左に挙げる。

宵過ぐるほど、すこし寝入りたまへるに、御枕上にいとをかしげなる女ゐて、「おのがいとめでたしと見たてまつるをば尋ね思ほさで、かくことなることなき人を率ておはして時めかしたまふこそ、いとめざましくつらけれ」とて、この御かたはらの人をかき起こさむとすと見たまふ。物に襲はるる心地して、おどろきたまへれば、灯も消えにけり。

（夕顔①一六四頁）

この物の怪の正体については多くの注釈書や先行論文によって考察されており、様々な説が提唱されている。

A　六条御息所（「六条わたりの女」）の生霊説[1]

B　廃院に棲む妖物説[2]

C　六条御息所と廃院の妖物の折衷説[3]

D　六条御息所の従者（中将）説[4]

E　心の鬼説[5]

F　読者たちが生み出した幻の女説[6]

G　『源氏物語』の高貴な女たちの代弁者説[7]

H　右大臣の四の君の呪詛説[8]

I　六条御息所の母・祖母説[9]

本稿では物の怪のセリフの「めざまし」と、プレテキストとしての源融の怪奇談に注目して、物の怪の正体を探っていく。

なお、物の怪のセリフ「いとめでたしと見たてまつるをば」の「をば」については、かつて接続助詞という説[10]もあったが、近年では「格助詞＋係助詞」という説[11]が主流となっており、本稿でもその考え方で論を進めていく。また、「いとめでたしと見たてまつる」の下には「人」が省略されていると考え、「おのがいとめでたしと見たてまつる（人）」については、当該場面の直前に源氏が六条御息所を想起していることから六条御息所と考えること

とする。

一　「めざまし」は誰に向けられた言葉か？

物の怪のセリフは次のように訳すことができる。

私がとてもすばらしいと見申す人（六条御息所）を尋ねようとお思いにならないで、このような格別なことのない人を連れておいでなさって御寵愛なさるとは、とても心外でつらいことよ。

このセリフの内容から、夕顔巻の物の怪の正体は六条御息所の生霊ではなく、他の第三者だということになる。また、その第三者は六条御息所と関わりのある人物だと推定される。ここで傍線部の形容詞「めざまし」に着目する。

『新編日本古典文学全集』の注によると、「めざまし」は「意外なことを見て、目をみはる感情。卑者を見下す階級意識を潜める場合が多い」とあり、階級意識が含まれた言葉であるという。また、『古語大辞典』[12]の語誌でも、

本来は、単に目が覚めるほど意外だという意だったが、平安文学などの用例では、階級意識・上下意識に支えられており、上者から見て、下者の言動に身分・分際を越えたものがあると感じられた場合に、用いられている。従って、けなすときには、身の程を知らない失敬なことだという感じ、また、ほめるときには、身分の低いわりには大したものだという感じを伴う。

とあり、「めざまし」は階級意識を伴う表現だと言われている。では、『源氏物語』における「めざまし」はどうであるのか、用例を見て判断したい。

『源氏物語』内での「めざまし」の用例は六六例ある（「めざましがる」「めざましげなり」「めざましさ」を除く）。「めざまし」には相手をけなす意味と褒める意味があるが、圧倒的に多くの用例が相手をけなす意味で使われている。その場合、ほとんどが階級上の人物から階級下の人物に向けて使われている（源氏→女房、源氏→中の品の女性、大臣→中将など）。特に、身分意識が如実に表れているのが次の場面である。

よき四位五位たちの、いつききこえて、うち身じろきたまふにもいといかめしき御勢ひなるを見送りきこえて、「いで、あなめでたのわが親や。かかりける種ながら、あやしき小家に生ひ出でけること」とのたまふ。五節、「あまりことごとしう恥づかしげにぞおはする。よろしき親の、思ひかしづかむにぞ、尋ね出でられたまはまし」と言ふもわりなし。「例の、君の、人の言ふこと破りたまひて、めざまし。今はひとつ口に言葉なまぜられそ。あるやうあるべき身にこそあめれ」と腹立ちたまふ顔やう、

（常夏③二四六頁）

これは近江の君と五節の会話の場面である。近江の君は父親が内大臣である事実を知ることで、階級意識が芽生える。そして、五節の身分の低さを見下し「めざまし」を使う。やはり「めざまし」は『源氏物語』でも階級・身分意識を含んだ言葉として使われていると判断していいだろう。

さて、では物の怪の「めざまし」という言葉は、誰に対して向けられているのだろうか。

猿渡学は[13]「六条わたりの女」の気位の高さに注目し、

「めざまし」という語は、日本古典文学全集の頭注に「卑者を見下す階級意識を潜める場合が多い」とあるように、自分よりも下位にありながら、時めいているものに対する反発、憎しみを示す表現であり、それは「いとをかしげなる女」の位置を示す表現である。この言葉から浮かんでくる身分の高さというものは、夕顔巻において語られる六条わたりの女の身分の高さと矛盾なく重なってくるのである。

というように、「めざまし」は「六条わたりの女」から夕顔に向けられた言葉だと主張している。

しかし、改めて物の怪のセリフを確認しよう。

まず、この物の怪は源氏の夢の中だけに登場しているのだから、そのセリフも源氏に向けられたものであると判断できる。

そして、セリフの内容だが、物の怪は「かくことなることなき人を率ておはして時めかしたまふこそ」を「いとめざましくつらけれ」と言っている。「時めかしたまふ」と「こそ」の間に体言が省略されているが、おそらく「こと」または「あなた（源氏）」であろう。つまり物の怪は、夕顔のような身分の低い女を寵愛している〈こと〉または〈あなた（源氏）〉を「めざまし」と言っているのである。これはセリフの発言者が六条御息所の生霊であってもその他の第三者であっても同じことである。よって「めざまし」は源氏に向けられた言葉なのある。

二　誰が源氏に対して「めざまし」と言えるのか？

第一節の分析で、「めざまし」は源氏のふるまい、または源氏自身に向けられているとした。また、「めざまし」は格上の者が格下の者をけなす表現であることも確認した。

では、一体誰が源氏に対して「めざまし」という言葉を用いてけなすことができるのだろうか。源氏へ向けられた「めざまし」の用例は『源氏物語』において全部で三例ある。≪　≫の中は「めざまし」が誰から誰に向けられているかを表すこととする。

①≪葵の上→源氏≫

同じ大臣と聞こゆる中にも、おぼえやむごとなくおはするが、宮腹にひとりいつきかしづきたまふ御心おごりいとこよなくて、すこしもおろかなるをばめざましと思ひきこえたまへるを、

（紅葉賀①三二三頁）

②≪右大臣→源氏≫

のどめたるところおはせぬ大臣の、思しもまはさずなりて、畳紙を取りたまふままに、几帳より見入れたまへるに、いといたうなよびて、つつましからず添ひ臥したる男あり。今ぞやをら顔ひき隠して、とかう紛らはす。あさましうめざましう心やましけれど、

（賢木②一四六頁）

③≪弘徽殿大后→源氏≫

かく一所におはして隙もなきに、つつむところなくさて入りものせらるるむは、ことさらに、軽め弄ぜらるるにこそは、と思しなすに、いとどいみじうめざましく、

（賢木②一四九頁）

①は、葵の上が、左大臣と宮腹の一人娘で大切にされている気位の高さから、源氏から少しでも粗略に扱われることを「めざまし」と思っていることを語る。②は、源氏と朧月夜の君の密通の現場を発見した右大臣が、源氏のことを「めざまし」と思っていることを語る地の文である。③は、弘徽殿大后が、朧月夜と密通している源氏のふるまいに憤怒して、源氏のことを「めざまし」と思っていることを語る地の文である。これらを見ると、一例は大臣階級の人物、一例は弘徽殿大后という皇太后の身分の人物、もう一例は左大臣並みの気位の高さを誇る葵の上から、源氏は「めざまし」というけなし言葉を使われている。源氏の階級は①の時点では正三位中将、②③の時点では大将であることから、いずれの用例も源氏より相当身分・階級が格上の人物から「めざまし」を使われている。よって、源氏に「めざまし」というけなし言葉を使うことのできる人物は相当な階級の人物だということが分かる。

では、物の怪のセリフに戻ろう。まず、「めざまし」を使う人物は相当な階級の人物であることから、六条御息所は物の怪の正体ではないと言えるだろう。六条御息所はかつて大臣の娘で東宮妃という高い身分であったが、その後は父大臣と前東宮に先立たれたことで後ろ盾を無くし没落している。そのような彼女が源氏に「めざまし」という格下の者へのけなし言葉を使うとは考えづらい。

物の怪の正体は六条御息所ではなく、六条御息所と関わりのある第三者であること、また「めざまし」は格上の者から格下の者へのけなし言葉であること、この二つの条件を組み合わせると、物の怪の正体は、六条御息所と関わりのある、源氏よりも相当身分の高い人物であるということになる。このような条件に当てはまる人物はいるのだろうか。

ここで最後に、押さえておきたいのが、源氏への「めざまし」の②の用例である。右大臣は娘である朧月夜の君への源氏の不埒なふるまい（不義密通）に対して「めざまし」と評している。このように、父親が自分の娘に対する男のふるまいに対して「めざまし」と評する例が賢木巻にもある。

≪右大臣→頭中将≫

かの四の君をも、なほ離れ離れにうち通いつつ、めざましうもてなされたれば、心とけたる御婿の中にも入れたまはず。

（賢木②一三九頁）

右は、婿の頭中将が四の君の許に途絶えがちであることに対して舅の右大臣が「めざまし」と感じていることを語る地の文である。ここから、「めざまし」は、身分の高い父親がまだ身分の低い婿に対して、娘への粗略な扱いを非難する際に使われるということが見てとれる。このことは、夕顔巻の物の怪の正体を突き止めるのに、重大な要点となる。

三　源融の怪奇談

次に、夕顔巻の怪奇事件のプレテキストとされている源融の怪奇談に注目する。

源融の怪奇談とは、『今昔物語集』や『江談抄』、『紫明抄』、『河

海抄』などに載せられている河原院を舞台とした有名な話であり、十世紀末には広く人々に知られていたと言われている。話の概要はこうである。寛平法皇（宇多院）は京極御息所を連れ、河原院を訪れお休みになっていると、人の気配がしたので、法皇は「誰だ」と問う。それに対し霊物は「融にて候ふ」と応え、京極御息所の腰を抱き襲った[14]。

源融の怪奇談は実話だとされているが、源融が霊となって京極御息所を襲うという行為には理由があったとされている。

ここで注目すべきは、河原院は元々源融の邸宅であったということである。源融の死後、河原院は融の息子昇に継承され、その後宇多法皇に献上された。

そして、もう一つ注目したいのが、京極御息所と同時期に源融の愛孫である小八条貞子も宇多院に仕えていたということである。

京極御息所は、当時宇多院の尚侍であり、院からの寵愛が厚い女性であった。よって、この怪奇談でも宇多院にわざわざ河原院へ連れてこられているのである。一方、源融の孫娘小八条貞子は、宇多院の更衣であったが、京極御息所に比べ院からの寵愛が薄かった。つまり、京極御息所と小八条貞子の二人はライバル同士であり、京極御息所の方が院からの寵愛が厚く優勢だったという[15]ことである。小林茂美によると、

宇多帝に入内した愛孫小八条貞子への帝寵はうすく、こともあろうに、生前には不快・憤懣の対象であった基経の孫女褒子（稿者注：京極御息所）を河原院に常住させ、そこが宇多院・褒子の艶態の場にされた

という。源融の死後、河原院は宇多院と京極御息所の逢瀬の場として使われるようになった。かつて自らの邸宅であった河原院で、愛孫のライバルである京極御息所が宇多院に寵愛されているという事実に、源融は憤りを隠せなかったと考えられる。よって、源融は霊として出現し、京極御息所を取り殺そうとしたのである。つまり、源融の怪奇談は、「自分の子孫ために霊となって子孫のライバルを襲う」という要素を持った話だったのである。そして、この「子孫のために霊として出現する」という重要な要素が、源融の怪奇談をプレテキストとしている夕顔巻の怪異事件にも引用されているとは考えられないだろうか。

源融の怪奇談の登場人物が夕顔巻のどの登場人物に対応するかまとめてみる。

〈源融の怪奇談〉		〈夕顔巻〉
宇多院	↕	源氏
京極御息所	↕	夕顔
小八条御息所	↕	六条御息所
源融	↕	?（物の怪）

それでは、夕顔巻における源融の霊は誰に当たるのだろうか。源融の怪奇談のように自分の子孫のために物の怪として現れたのだとするならば、この場合守られる子孫の立場にいるのは六条御息所となり、物の怪の正体は六条御息所の祖先となるはずである。

四　葵巻の「故父大臣の御霊」

第二節で考察したように、物の怪のセリフから、物の怪の正体

は六条御息所と関わりがあり、源氏より高い身分である。そして、第三節で明らかにしたように、源融の怪奇談をプレテキストとすると、物の怪の正体は六条御息所の祖先という線が浮かび上がってくる。そのような条件にあてはまり、なおかつ物語中に登場する人物といえば――たった一人いる。六条御息所の「故父大臣」である。

大殿には、御もののけいたう起こりて、いみじうわづらひたまふ。この御生霊、故父大臣の御霊などいふものありと聞きたまふにつけて、おぼし続くれば、身一つの憂き嘆きよりほかに、人をあしかれなど思ふ心もなけれど、もの思ひにあくがるなる魂は、さもやあらむとおぼし知らるることもあり。

（葵巻②三五頁）

これは、六条御息所が生霊となり、葵の上を襲う直前の場面である。「この御生霊」とは六条御息所自身の生霊のことである。その後に続く「故父大臣の御霊」とは、六条御息所の亡き父親の霊である。葵巻にきて、それまで全く登場しなかった「故父大臣」が人々の噂上としてではあるものの、「御霊」として紹介されたことは注目したいところである。

私は、夕顔巻の物の怪の正体は六条御息所の「故父大臣の御霊」であると考えたい。「故父大臣の御霊」は六条御息所の祖先であり、夕顔巻時点の中将である源氏より身分が高く、条件に当てはまるからである。

物の怪の正体について、三谷邦明[16]は、『源氏物語』内外のテキストの導入いかんによる様々な説を論じているが、そのうちの一つとして、葵巻の「故父大臣の御霊」の記述から、六条御息所の夫「故前坊」や「故父大臣」が、政変によって恨みを抱き夕顔巻の物の怪となったと主張することも可能だと言及している。しかし、三谷は、「資料をさまざまに動員して、この説を、この論文で主張しようとは考えていない」と述べて、それ以上深く論じることはなかった。

本稿では、三谷の「故前坊」説については支持しないものの、「故父大臣」説の示唆については賛同したい。そして、さらに突き進めて「故父大臣の御霊」こそが夕顔巻の物の怪の正体だと主張したい。

五　葵巻「故父大臣の御霊」登場の目的とは？

では、葵巻の「故父大臣の御霊」は何の目的によって登場したのだろうか。「故父大臣の御霊」について、『新編日本古典文学全集』の注では

御息所の今は亡き父大臣。その父大臣が、左大臣を恨んで死んだとも読めるか。それならば、左大臣に対立的であった右大臣の政治的敗北ということになる。

とあり、左大臣に対する政治的な恨みによって現れたという解釈がされている。三谷も、同様の解釈をしている。

しかし、はたしてそうであろうか。この葵巻の場面で父大臣の霊は六条御息所の霊と並んで登場している。また、このとき六条御息所は葵の上への嫉妬心ゆえに生霊となったのは言うまでもない。そこに父大臣の霊が揃って登場し、六条御息所とは全く違う、左大臣個人への政治的な恨みによって登場したというのは、いさ

さか不自然である。

『岷江入楚』の注には、

御息所思ひにひかれて父左大臣の霊もより来る歟

とあり、父左大臣の霊が六条御息所の思い、つまり葵の上への嫉妬心にひかれて登場したとある。[17]

また、『明星抄』の注では、

具平親王宇治ノ関白霊気に出給事栄花物語第十二にあり

とあり、『栄花物語』第十二に、葵巻のように父親の霊が登場する例があると述べている。『栄花物語』と言えば、藤本勝義によると、[18]

栄花物語には百例前後の「物の怪」の用例があり、三十人前後の人物が物の怪に憑依されている。

とあり、物の怪描写が特に多い平安後期文学作品だと言える。

よって次節から、『岷江入楚』、『明星抄』がどのようなことを述べているのかを検証するために、物の怪の描写が特に多い『栄花物語』において「父親の霊」または「親子の霊」が登場する場面を調べ、これらがどのような目的で現れるのかを見ていきたい。

六『栄花物語』の「父親の霊」

まず、『明星抄』が指摘していた『栄花物語』第十二の「具平親王宇治ノ関白霊気に出給事」を見ていきたい。

御物の怪、殿の御前を「近く寄りたまへ」と申せば、寄らせたまへれば、「己れは世にはべりしをり、いと痴れたりなどは人におぼえずなんはべりし。またあはあはしく出で来て、人なかにかやうにものなど聞ゆる、いとめめしくなどあることなれど、子のかなしさはおのづから大臣も知りたまへればなん。…」　（巻第十二たまのむらぎく　六二頁）

これは、具平親王が物の怪として道長の前に現れた場面である。この時、具平親王の娘隆姫の夫である頼通に女二宮降嫁の話があり、具平親王の霊はその縁談の中止を訴えている。このセリフの内容から、具平親王は明らかにわが娘（隆姫）かわいさから物の怪として出現したことが分かる。具平親王は死霊になっていても、自分の娘のことを心配しているのである。このことから、「父親の霊」は自分の娘への愛情から物の怪として現れ、娘のために尽力する例があることが分かる。

『明星抄』はこの『栄花物語』第十二を挙げることで、葵巻の「故父大臣の御霊」も自分の娘（六条御息所）のために霊として出現した、と述べているように解釈できる。

また、「娘を想う父親の霊」の例は「巻第十四あさみどり」にも存在する。

かくて故殿（稿者注：道兼）たびたび夢に見えさせたまひ、物の怪に出でたまひなむとすれど、さりとて思とまるべきことにもあらぬを、姫君、いでや、尼にやなりなましと、人知れず思し乱るれど、まめやかなる御心などのあめるに、また今さらにけしからぬやうにやはなど思すも、あはれになん。

（巻第十四あさみどり　一四四頁）

亡き道兼は出仕が決まった娘、道兼女を心配し、物の怪として夢枕に現れている。この用例からも、やはり「父親の霊」は自分の娘を想う気持から出現することが分かる。

七『栄華物語』の「親子の霊」

次に、『栄花物語』の「親子の霊」を見ていく。『栄花物語』には藤原顕光（堀河の大臣）・延子父娘の霊が多く登場し、この父娘の霊が登場する場面は、はっきり分かるものだけでも五例ある。葵巻と同じ「父娘の霊」であることも注目したい。〈　〉の中は父娘の霊が憑りついた相手を指すこととする。

a〈寛子〉

堀河の大臣、女御やなど引き連れて、いとおどろおどろしき御けはひ有様にてののしりたまへば、いとほしうかたはらいたうのみ思しめす。　（巻第二十四わかばえ　四六一頁）

b〈寛子〉

御物の怪どもいといみじう、「し得たり、し得たり」と、堀河の大臣、女御、諸声に「今ぞ胸あく」と叫びののしりたまふ。　（巻第二十五みねの月　四八二頁）

c〈嬉子〉

堀河の大臣、女御、さしつづきてののしりたまふさま、いとうたて恐ろしうあやにくなり。　（巻第二十五みねの月　四九三頁）

d〈嬉子〉

堀河の大臣、女御などの御霊、すべてゆゆしきことどもをぞ言ひつづけののしりたまふ。　（巻第二十六楚王のゆめ　五〇五～五〇六頁）

e〈妍子〉

御物の怪は、堀河の大臣の御けはひに、女御さしつづき出でたまひて、言ひつづけたまふことどもいと恐ろし。　（巻第二十九たまのかざり　一一五頁）

a～eの本文の中の「女御」とは延子のことである。この五例を見ると、全ての用例で父娘の霊は並んで登場し、同じ行動を取っている。

顕光・延子父娘の霊は初めa・bの用例で藤原寛子を取り殺すことを目的に行動しており、bの用例の場面で見事寛子を出家に追い込むことに成功している。延子は生前、道長の娘である寛子に小一条院の正妻の座を奪われ、そのことを恨んでいる。つまり、延子は生前の個人的な怨みから物の怪となって寛子に取り憑いたのである。

また嬉子を襲った理由は、彼女を襲うことで、東宮（小一条院）を退位させた道長を苦しめるためだと考えられる。妍子も同様の理由と考えられる。

それでは、なぜ父大臣顕光は延子とともに物の怪として現れたのだろうか。

ここで、前節の「父親の霊」の特徴を見返してみよう。具平親王をはじめとする「父親の霊」は自分の娘を心配し物の怪となる特徴があった。それは、この「父娘の霊」でも同じことではないだろうか。つまり、父顕光の霊は娘延子のかわいさから、延子のために共に物の怪として登場しているのではないだろうか。よって、娘延子の生前の怨みを晴らすため、父顕光の霊は娘延子の霊の手助けをしていると考えられる。[19]

このように、『栄華物語』における「父親の霊」、「親子（父娘）

の霊」はどちらも亡き父親がわが娘（の霊）を援助するために物の怪として現れているのである。ここで、改めて葵巻の「故父大臣の御霊」に対する『岷江入楚』の注を振り返ると、

御息所思ひにひかれて父左大臣の霊もより来る歟

とは、「故父大臣の御霊」が娘である六条御息所の生霊の思いにひかれ、娘を援助するために霊として出現したと読み取れるのではないだろうか。賢木巻に「御息所、御輿に乗りたまへるにつけても、父大臣の限りなき筋に思し心ざしていつきたてまつりたまひしありさま」（賢木巻②九三頁）とあるように、六条御息所の父大臣は娘を大切にしていた。葵巻の「故父大臣の御霊」は大切な娘六条御息所を援助するために登場したと考えられる。

よって、夕顔巻でも「故父大臣の御霊」は娘六条御息所のために物の怪として現れたのではないだろうか。第二節の②の用例の分析の際に述べたように、身分高い父親が身分低い婿に対して、娘への粗略な扱いを非難する場合に「めざまし」が使われることがあった。六条御息所の父大臣も、娘のために物の怪として現われ、娘をないがしろにする中将光源氏に対して「めざまし」と非難したのではないだろうか。

おわりに

これまでの分析から、私は夕顔を取り殺した物の怪の正体は六条御息所の「故父大臣の御霊」であると推測する。根拠としては、物の怪のセリフの内容、またセリフの中の「めざまし」という語、プレテキストの源融の怪奇談、葵巻の「故父大臣の御霊」の記述、父親の霊の特徴などが挙げられる。

特に「めざまし」は身分が格上の人物から格下の人物に使われる語であり、源氏に「めざまし」を使う物の怪の正体は源氏よりも身分が格上の人物である。「故父大臣の御霊」は大臣階級であり、中将である源氏より身分が格上であることから当てはまる。また、第二節の最後に紹介したように、『源氏物語』の「めざまし」の用例の中には、父親が娘に対する婿の冷たい態度を非難する際に「めざまし」を使う例があり、夕顔巻とも状況が合致する。よって、夕顔巻の怪奇事件は、「故父大臣の御霊」が、源氏に粗略な扱いをされる娘六条御息所がかわいそうだという感情から引き起こされた事件だと考察する。

最後に、物の怪の姿が男性ではなく、「いとをかしげなる女」であることについての見解を述べておきたい。

物の怪の「をかしげなる女」の姿は源氏が見た六条御息所の幻覚だと私は考えている。源氏は物の怪が現れる直前に「六条わたりの女」（六条御息所）のわずらわしさを思い返していた。

かつはあやしの心や、六条わたりにもいかに思ひ乱れたまふらん、恨みられんに苦しうことわりなりと、いとほしき筋はまづ思ひきこえたまふ。何心もなきさし向かひをあはれと思すままに、あまり心深く、見る人も苦しき御ありさまをすこし取り捨てばやと、思ひくらべられたまひける。

（夕顔①一六三～一六四頁）

このことから、源氏は夢に見た物の怪（故父大臣の御霊）に無意識に六条御息所の姿を重ねてしまったのではないかと考える。『日本古典文学全集』の注にも、

夕顔に溺れることの、六条御息所へのうしろめたさが、夢になって源氏を責めるのである。荒廃した院に棲む霊物と、夢の中の御息所の姿形とが二重写しに語られている。

とあるように、「をかしげなる女」の姿は源氏の六条御息所へのうしろめたさが創り出した幻覚であり、物の怪（故父大臣の御霊）そのものの姿ではないと考える。なお、ここで物の怪に姿があるのかなどの問題を深く考えることはしない。

結論として、私は夕顔巻の物の怪の正体は六条御息所の「故父大臣の御霊」であると考える。

そして、夕顔巻が源融の怪奇談をプレテキストにしていることから、「故父大臣の御霊」は同じ大臣であった源融をモデルにしていると考える。この説は類似する説はあるものの、新しい説としてここに示す。

注

（1）『細流抄』（源氏物語古注集成、桜楓社）、『明星抄』（源氏物語古註釈叢刊、武蔵野書院）、『眠江入楚』（源氏物語古注集成、桜楓社）、『源氏物語新釈』（賀茂眞淵全集　第一三巻、続群書類従完成会）、志村士郎「源氏物語夕顔巻解釈上の一問題」（『国文学　言語と文芸』第一巻、一九五九年七月）、小林茂美「『融源氏の物語』試論―その命題と『源氏物語』との交渉」（『源氏物語論序説―王朝の文学と伝承構造Ⅰ―』桜楓社、一九七八年）、渡辺泰宏「おのがいとめでたしと見奉るをばたづね思ほさで―その解釈とものけの正体―」（『中古文学』四六巻、一九九〇年一二月）、猿渡学「時めかしたまふこそ―夕顔巻の『いとをかしげなる女』と六条御息所―」（『文藝研究』第一四六集、二〇〇〇年四月）、広瀬唯二「夕顔の巻の物の怪をめぐって―物の怪と鳥の声―」（『武庫川国文』第六十一号、二〇〇三年三月）。

（2）玉上琢彌『源氏物語評釈　第一巻』（角川書店、一九六四年）、深沢三千男「夕顔怪死事件についての一考察」（初出一九六三年。『源氏物語の形成』桜楓社、一九七二年）、橋原茂子「『六条わたり』の女の特異性」（『源氏物語と歌物語　研究と資料』武蔵野書院、一九八四年）、中島あや子「なにがし院の怪―夕顔巻」（初出一九九二年。『源氏物語の構想と人物造型』笠間書院、二〇〇四年）。

（3）『日本古典文学全集』、『完訳日本の古典』、『新編日本古典文学全集』、門前真一「夕顔の巻のものけ追考―Xの設定―」（『國語國文』第二七巻第一〇号、一九五八年十月）、今井源衛「『おのがいとめでたし』考」（『源氏物語とその周縁』和泉書院、一九八九年）、呉羽長「『源氏物語』帚木三帖の構想的位相―『夕顔』巻『おのがいとめでたしと』の解に触れて」（『富山大学人文学部紀要』五三巻、二〇一〇年八月）。

（4）小谷野純一「『源氏物語』夕顔巻における〈霊物〉の介存をめぐって」（雨海博洋編『歌語りと説話』新典社研究叢書一〇二、新典社、一九九六年）、井野葉子・山田昌裕「『源氏物語』の文法講座　をば」（『人物で読む「源氏物語」第八巻―夕顔』勉誠出版、二〇〇五年）。

（5）三谷邦明「源氏物語第三部の方法―中心の喪失あるいは不在の物語―」（初出一九八二年。『物語文学の方法Ⅱ』有精堂、一九八九年）、同「誤読と隠蔽の構図―夕顔巻における光源氏あるいは文脈という射程距離と重層的意味決定―」（初出二〇〇〇年。『源氏物語の言説』翰林書房、二〇〇二年）。

（6）武原弘「「夕顔」巻の主題と方法について―もののけ正体論に

触れつつ―」（『国文学研究』（梅光女学院大）第八巻、一九七二年一一月）。

（7）藤本勝義「夕顔造型―その性情と死―」（初出一九九六年。『源氏物語の人　ことば　文化』新典社、一九九九年）。

（8）黒須重彦「夕顔をとり殺した物の怪について」（『源氏物語私論―夕顔の巻を中心として―』笠間書院、一九九〇年）。

（9）浅尾広良「六条御息所と先帝―物の怪を視座とした源氏物語の構造―」（初出一九八五年。『源氏物語の准拠と系譜』翰林書房、二〇〇四年）。

（10）注（1）に挙げた『源氏物語新釈』。

（11）『日本古典文学大系』、『日本古典文学全集』、『新編日本古典文学全集』、『新日本古典文学大系』、岩波文庫『源氏物語』（二〇一七年）、門前真一「夕顔の巻の『おのがいとめでたしと見奉るをば……』の『をば』について補説」（『天理大学学報』一〇巻二号、一九五八年一一月）、寺田泰政「『いわゆる同格的用法』の『が』について」（『国語研究』八号、一九五八年一一月）、岩瀬法雲「夕顔の巻の物の怪―門前教授の『おのがいとめでたしと見奉るをは』に対するお答え」（『季刊　文学・語学』第四一号、一九六六年九月）、門前真一「夕顔の巻のもののけをめぐる諸問題―『をば』の感動表現説批判―」（『國文学：解釈と教材の研究』一二巻九号、一九六七年七月）、門前真一「『おのがいとめでたしと見奉るおのれ』といふ文構造を作り出せるか―同格句説批判―」（『山辺道』十四号、一九六八年七月）、注（1）に挙げた渡辺泰宏の論文、注（4）に挙げた井野葉子・山田昌裕の論文。

（12）中田祝夫・和田利政・北原保雄編『古語大辞典』（小学館、一九九四年）。

（13）注（1）に挙げた猿渡学の論文。

（14）『紫明抄』『河海抄』の概要。なお、『江談抄』「融大臣の霊、寛平法皇の御腰を抱く事」では、融の霊は宇多院の腰を抱くが、半死するのは京極御息所であり、話の流れは共通している。『今昔物語集』「川原院融大臣霊宇陀院見給語第二」では京極御息所は登場せず、宇多院と融の霊の問答のみとなっている。

（15）注（1）に挙げた小林茂美の論文。

（16）注（5）に挙げた三谷邦明「誤読と隠蔽の構図―夕顔巻における光源氏あるいは文脈という射程距離と重層的意味決定―」。

（17）六条御息所の父を『新編日本古典文学全集』では「右大臣」、『岷江入楚』では「左大臣」と判断しているが、「右大臣」だったのか「左大臣」だったのかは物語に書かれていないため、右か左かについてはここでは問わない。

（18）藤本勝義「栄花物語の物の怪―憑霊現象の方法と意義―」（初出一九九〇年。『源氏物語の〈物の怪〉―文学と記録の狭間―』笠間書院、一九九四年）。

（19）藤本勝義「「前坊」「故父大臣の御霊」攷」（初出一九八三年。『源氏物語の想像力―史実と虚構―』笠間書院、一九九四年）も、具平親王が娘かわいさに霊として現れたのと同様に、顕光の霊も寛子を恨む娘延子かわいさに顕現したと言っている。

※『源氏物語』『栄花物語』の本文は新編日本古典文学全集、『岷江入楚』の本文は源氏物語古注集成、『明星抄』の本文は源氏物語古註釈叢刊に拠る。

（もりかわなな）　本学文学部文学科日本文学専修